

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：32524

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02546

研究課題名(和文)「包摂と排除」の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究

研究課題名(英文) Research on social consciousness of "inclusion and exclusion" and improvement of social studies curriculum

研究代表者

坂井 俊樹 (SAKAI, TOSHIKI)

開智国際大学・教育学部・教授

研究者番号：10186992

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：4年間の研究期間で、分担研究者と研究協力者間で、「排除」と「包摂」に関する社会科カリキュラム・授業開発の議論を重ねて来た。私たちの立場は、社会的排除された子どもたちを直接の対象と考えるのではなく、通常の学級・学校の授業において、この問題に向き合う視点と方法を議論してきた。その意味では、新しい観点から、既存の社会科の実践を再検討した。その結果、排除と包摂の教育をめぐる教育的な課題が明確になった。小学校から高校までの実践開発が積極的に進められた。私たちはこの成果を社会に発信するために、学会で発表はもとより、論文として公表してきた。最終的には、最終報告書に代えて書籍として出版することにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日のグローバル化する経済社会と格差・貧困の拡大は限界を超えている。またコロナ禍は、こうした諸矛盾の拡大に一層の拍車をかけた。社会的に排除される人々の急増に対して、教育実践は具体的に何を提起できるのか。私たちは、通常、当たり前前に展開される社会科の教育実践を問い直し、新たな実践的問題提起を図ることができた。そのことは社会認識として子どもたちの「学び」の再構築にもつながった。また理論的にはそれらの諸実践を支える枠組みを提案できた。わたしたちが当たり前前に進める教育実践に対して、否定ではなく、それを乗り越えていくための授業とカリキュラムを提案できた。

研究成果の概要(英文)：During the four-year research period, discussions on social studies curriculum and lesson development on "exclusion" and "inclusion" have been repeated between shared researchers and research collaborators. Our position has discussed perspectives and methods to address this issue in regular classroom and school lessons, rather than directly targeting socially excluded children. In that sense, we reexamined existing social studies practices from a new perspective. As a result, the pedagogical challenges surrounding the education of exclusion and inclusion became clear. Practical development from elementary school to high school was actively promoted. In order to disseminate this result to society, we have published it as a paper as well as at an academic conference. Eventually, I decided to publish it as a book instead of the final report.

研究分野：歴史教育・社会科教育、韓国教育史

キーワード：社会的「排除」 社会的「包摂」 新自由主義 コロナ・パンデミック 当事者性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

研究開始時は、コロナ禍以前の段階であり、まだ Society5.0 やそれに対応した AI の拡大による新しい社会への対応などが関心事であった。また地球環境問題、とくに SDGs などの提唱もあったが、教育実践はこれらにどのように向き合うかという模索段階であった。

他方で、本研究テーマの「社会的排除」と「社会的包摂」に向き合う教育実践の課題は、新自由主義とグローバリズムのもとで、その社会的矛盾は極度に肥大化してきた状況の認識があった。とくに外国人労働者の依存や内戦による難民の大量発生と流入の問題が深刻化していた。経済的格差の拡大、外国人労働者の流入をはじめ、ジェンダーや社会的弱者の問題、地域問題、教室から排除されてしまう子どもたちのことなど、学校内外、諸外国での多様な領域での社会的矛盾が肥大化してきた。そして何よりも、日常生活の中に「社会的排除」の問題が具体的に実感される形で引き起こされてきたといえる。その点で、社会的排除された人々の包摂、子どもたちの包摂は、今日の教育にとって、きわめて重要な課題となったといえる。こうした世界的に進行する社会的排除の問題を、学校教育、特に社会科カリキュラムの問題として迫る必要が深刻化したといえる。

2．研究の目的

1990 年代の EU ヨーロッパ連合 の統合のもとで、掲げられた理念が社会的排除と包摂である。以来、政策概念としての意味を持ち、本研究でも教育政策的に具現化する課題として受け止めた。この政策概念を、通常の小・中・高校での社会科を中心とした教育実践を規定する要素として取り組み、既存のカリキュラムに対して検討し、提案するのが目的であった。というのも、今日の格差が拡大する社会のもとで、過剰な競争意識や、他者への配慮を欠落させる社会認識が、子どもたちを取り巻いているのではないかという危惧があるからである。それは水俣病や原子力発電所事故の被害をはじめとする多様な社会問題のなかで、被害を被った人々など少数者の存在も、大きな社会や経済のうねりの中では「しかたないのでは」「少々の犠牲もやむを得ない」という発想が増えているのではないかと私たちの危機意識と結びついている。

こうした発想を超えていくためには、一つ一つの教育実践を積み上げ、具体的に授業を通して社会システムとはどうあるべきかを踏まえて、克服していく方向を考えた。その上で、これからの本テーマに向き合う社会科カリキュラムを検討していくことにする。このカリキュラム試案を、授業実践とともに、日本社会科教育学会全国研究大会等で発表する予定である。発表により、広く議論を喚起できたらと考えている。

3．研究の方法

大学勤務の代表・分担研究者 7 人は、理論的に、歴史的に、排除と包摂を考える枠組みを検討し、授業実践の視点に絞り込んで理論化し提案していくことにした。とくにコロナ禍でこうした社会的矛盾がより深刻化したために、コロナ禍での分析も進めるようにした。具体的には多文化共生、地域問題、学校統廃合問題、コロナ禍のもとでの子どもたちの意見表明、夜間定時制高校の現状などから迫ることであった。

また本研究の大きな柱として、理論的な枠組みを参照しながら、研究協力者である小・中・高校の教員が、教材開発と新しい方法を取り入れて、授業の提案をしていくことであった。この提案のために事前に協議の場を設けて、協働しながら授業を構想していく方法をとった。また単元の核となる授業については、できるだけ多くの分担研究者も授業参観する機会を持つようにした。授業づくりを進めるにあたり、各地の調査研究を進めることとした。新潟ミナマタ病や熊本のミナマタ病、福島県の放射能被害地域など、現地調査を進める

さらに併せて、外部講師を委嘱し、本研究テーマにかかわる現場での取り組みを勉強することにし、その記録を活字化した。

以上を報告書として原稿化して公表することにする。

4．研究成果

研究成果として、1 年次終了時には、「科研費・初年次研究報告書」を刊行した。2 年次以降、調査研究・小・中・高校における授業実践を順番で積み上げていった。しかし研究成果をさらに深めたり、まとめたりする段階で、コロナ禍が起こり、当初はオンラインでの研究会もメンバーが各職場での対応に忙殺され中断したが、その後、オンラインやメールでの意見交換を進めたり、実践の再取り組みを進めた。授業進行に関しては、教材費や調査旅費を利用し、授業をより深められるようにした。そして最終年には、各自が理論的検証や取り組んだ教育実践を報告書として文章化し、提出することにした。現行は、12000 字以上として、提出を課した。最終年は、この提出された各自の報告原稿を、相互に意見交換を踏まえて修正をしながら、より公表に耐えるように加工した。そしてこれらの原稿を研究報告書に代えて、書籍として出版することにした。書籍は、できるだけ一般書として、広く読まれるように一般誌の刊行出版社を選定した。下記の

ものである。

○坂井俊樹編『社会的排除 に向き合う授業 - 考え話しあう子どもたち - 』新泉社、2022 年 3 月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 坂井俊樹	4. 巻 第29号
2. 論文標題 教職科目と教科内容科目の架橋をどう考えるか-アカデミシャン 歴史学 による教育への提言を中心に-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教師教育学会年報	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井俊樹	4. 巻 2020年報告書
2. 論文標題 「よい授業」とは—「社会的排除」に抗する授業づくりから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 寺本妙子編「SDGsの考え方に基づく地域教育カリキュラムの開発研究」（開智国際大学教育学部プロジェクト研究報告書）	6. 最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆弘	4. 巻 報告論文集
2. 論文標題 平和教育と市民教育 - 新科目「公共」実施と公民教育の関係から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本平和学会：学会大会（分科会）	6. 最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井俊樹・宮田浩行・斎藤征俊・板垣雅弘・井山貴代	4. 巻 第69巻
2. 論文標題 水俣事件史に学ぶ歴史教育の視座—近代化・植民地支配・大衆化を問う視点と理論的整理と諸実践—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本社会科教育学会第69回大会『研究発表論集』	6. 最初と最後の頁 160-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 荒井正剛	4．巻 単著
2．論文標題 地理授業づくり入門—中学校社会科での実践を基に—	5．発行年 2019年
3．雑誌名 古今書院	6．最初と最後の頁 1-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 小松伸之	4．巻
2．論文標題 教科に関わる教養形成を軸とした教職カリキュラム改革	5．発行年 2019年
3．雑誌名 全国私立大学教職課程協会『私立大学の特色ある教職課程事例集』2019	6．最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 小瑶史朗	4．巻 第123号
2．論文標題 戦後史学習のコンテンツを問う—東アジアと「生存」の視座から—	5．発行年 2020年
3．雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 47 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 竹内裕一	4．巻 67-1
2．論文標題 地理教育における地域学習の位置-子どもたちの地域学習体験からの逆照射-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 新地理	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂井俊樹	4. 巻 第二巻
2. 論文標題 SDGsと教育の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 開智国際大学教育学部共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆弘	4. 巻 66号
2. 論文標題 開発教育における難民問題学習とその分析を通じて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『開発教育』	6. 最初と最後の頁 .92-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井俊樹	4. 巻 1
2. 論文標題 「社会的排除と包摂」の歴史的視点を巡って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科研第一年次報告書 『「排除と包摂の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究」』	6. 最初と最後の頁 1-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井俊樹	4. 巻 153
2. 論文標題 社会科教育は「当事者」にどう迫るか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター(金子真理子)編 『初等教員養成における教科内容学の意義・役割・相互関連』	6. 最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 荒井正剛	4．巻 1
2．論文標題 海洋国家・日本漁民の苦悩	5．発行年 2019年
3．雑誌名 科研第一年次報告書『「排除と包摂の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究」』	6．最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 竹内裕一	4．巻 1
2．論文標題 イタイタイ病現地調査から考える問題解決に向けた視点	5．発行年 2019年
3．雑誌名 科研第一年次報告書『「排除と包摂の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究」』	6．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 小瑶史朗	4．巻 1
2．論文標題 「包摂」を基軸にした社会科授業試論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 科研第一年次報告書『「排除と包摂の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究」』	6．最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 鈴木隆弘	4．巻 153
2．論文標題 新学習指導要領における労働法カリキュラムの予備的検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 科研第一年次報告書『「排除と包摂の社会意識と社会科カリキュラムの改善に関する研究」』	6．最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 坂井俊樹・斎藤征俊征俊
2．発表標題 「排除」と「包摂」と歴史（社会）認識 - 水俣事件史・3.11・感染症から問い直す -
3．学会等名 日本社会科教育学会全国大会（筑波大学・オンライン）
4．発表年 2020年

1．発表者名 荒井正剛
2．発表標題 中高連携を踏まえた「アフリカ州」の学習指導のあり方 ―イギリスでの学習指導を参考に―
3．学会等名 日本社会科教育学会全国大会（筑波大学・オンライン）
4．発表年 2020年

1．発表者名 鈴木隆弘
2．発表標題 平和教育と市民教育 - 新科目「公共」実施と公民教育の関係から - 平和教育と市民教育の現在」
3．学会等名 日本平和学会 秋季研究集会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 坂井俊樹・宮田浩行・斎藤征俊・板垣雅弘・井山貴代
2．発表標題 水俣事件史に学ぶ歴史教育の視座―近代化・植民地支配・大衆化を問う視点と理論的整理と諸実践―
3．学会等名 日本社会科教育学会第69回大会（新潟大学）
4．発表年 2019年

1．発表者名 小松伸之
2．発表標題 社会科文化学習における世界遺産の教材化 - 「文化遺産としての富士山」を通して「現在とのつながり」を考える
3．学会等名 日本教材学会第31回研究発表大会{ 東京学芸大学}
4．発表年 2019年

1．発表者名 鈴木隆弘
2．発表標題 「難民を巡る教材の検討 - これまでの成果と課題 - 」
3．学会等名 第37回 開発教育全国研究集会 JICA地球ひろ
4．発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1．著者名 小玉重夫・坂井俊樹・市川享子	4．発行年 2020年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 270
3．書名 第7章学士課程の教職課程修了時に育むことが望まれる資質能力 - 4 . 中学校社会科教員に要請される資質能力、早田幸政編『教員養成教育の質保証への提言』ミネルヴァ書房:270	

1．著者名 荒井正剛・小林春夫編	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 204
3．書名 イスラーム／ムスリムをどう教えるか—ステレオタイプからの脱却を目指す異文化理解—	

1．著者名 竹内裕一	4．発行年 2020年
2．出版社 古今書院	5．総ページ数 163
3．書名 「地理学習における主体的・対話的とは」井田仁康編著『持続可能な社会に向けての教育カリキュラム;地理歴史科』	

1．著者名 竹内裕一	4．発行年 2021年
2．出版社 明治図書	5．総ページ数 305
3．書名 「学校統廃合と地域学習のあり方;持続可能な地域づくりにおける人材育成 を視野に入れて」; 井田仁康編著『高校社会「地理総合」の授業を創る』	

1．著者名 竹内裕一	4．発行年 2020年
2．出版社 古今書院	5．総ページ数 140
3．書名 「世界地理の教育」地理教育研究会編『授業のための世界地理 第5版』	

1．著者名 坂井俊樹	4．発行年 2019年
2．出版社 教育出版	5．総ページ数 153
3．書名 大澤克美編『小学校社会科教師の専門性育成第三版』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究のまとめとしての出版物

坂井俊樹編『社会的排除 に向き合う授業 - 考え話しあう子どもたち - 』新泉社、2022年3月

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹内 裕一 (TAKEUCHI HIROKAZU) (00216855)	千葉大学・教育学部・名誉教授 (12501)	
研究分担者	鈴木 隆弘 (SUZUKI TAKAHIRO) (40433685)	高千穂大学・人間科学部・教授 (32637)	
研究分担者	荒井 正剛 (ARAI MASATAKA) (40795712)	東京学芸大学・教育学部・研究員 (12604)	
研究分担者	小瑶 史朗 (KODAMA FUMIAKI) (50574331)	弘前大学・教育学部・教授 (11101)	
研究分担者	重松 克也 (SHIGEMATU KATUYA) (60344545)	横浜国立大学・教育学部・教授 (12701)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究 分 担 者	小松 伸之 (KOMATU NOBUYUKI) (80609777)	清和大学・法学部・准教授 (32522)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------